

法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

後期旧石器時代の石材分布と石器群の検討 : 群馬県における石材研究

著者	井上 慎也
出版者	法政大学史学会
雑誌名	法政史学
巻	47
ページ	20-38
発行年	1995-03-24
URL	http://hdl.handle.net/10114/10509

後期旧石器時代の石材分布と石器群の検討

—群馬県における石材研究—

井 上 慎 也

はじめに

石器石材は「石」といった石質の相違に加え、産出地に限定される性格をもっている。その遺存状況は、地域性のある石材分布圏を形成する石材の動きとともに集団の移動形態にも反映している。つまり、石器やその材料である石器石材といった「モノ」の動きを探ることによって当時の集団間の接触や交易あるいは石材入手をめぐる集団の活動領域が想定可能となる。したがって、石材研究はこうした社会現象や集団の構造について重要な役割を果たしている現状にある。

この研究の流れは理科学的手法によるものとその成果を生かした考古学的手法にわけられる。前者は黒曜石、サヌ

カイト（黒色安山岩、ガラス質安山岩、緻密黒色安山岩などとも呼ばれる）といった分布の限定される石材をフィッシュントラック法や蛍光X線分析等によって産出地を特定し、遺跡から出土する石材と照合していくことによって判別していくものである。また偏光顕微鏡による肉眼観察による産地同定も進み、多地域で様々な石材の産出地あるいは分布範囲が特定されるようになった（藁科・東村一九八八、山本一九九三等）。最近では特定の石材に限らず、遺跡から出土する石材を肉眼観察で、遺跡周辺の地質や河川の礫の分布を参考にした推定も成果をあげている（柴田・山本・金山一九九一）。一方、後者はこうした研究の成果を踏まえ、遺跡から出土する石器石材の組成の違いにより、遺跡と石材産出地との地理的環境や石材選択に

着目して、民族学・生態学の成果や方法を用いて構造的な石材獲得のシステムの復元がおこなわれている（田村一九八九、佐藤一九九二）。また遺跡内の石器製作工程における石材の適用にも関連させ、石器の型式学的検討にも用いられている。

特に技術的な側面と遺跡の機能的側面とを合わせ持った研究の一つに西日本における瀬戸内技法とサヌカイトとの関係（中・四国旧石器文化談話会一九九四）や武蔵野台地の石器群の段階的な構造変化によって遠隔地石材の黒曜石と在地石材の割合の変化の指摘（福田一九八四）、遠隔地石材の遺跡への入手システム（小野一九八八）の方法等の研究は蓄積されつつある。その後、地域研究の一つに千葉県において石材の分析と遺跡の分析を総合した研究がおこなわれ、そこで本格的に石材を考古学的資料として遺跡での関係が検討可能となった（田村・澤野一九八七）。

こうした成果は全国に分布する石材の種類と範囲の解明だけではなく、石器の型式圏と対応する集団構造と関与する石材分布圏も設定されている。また遺跡の性格も石材産出地付近に展開される大規模な遺跡などを「原産地遺跡」と呼称し、周辺の石器群との関係も論じられている（岡村一九九〇）。

後期旧石器時代の石材分布と石器群の検討（井上）

したがって地域ごとに集中する石器群の石器型式の比較検討に加え、石材組成の点からも石器群の構造的な研究を進める必要がある。そこで北関東地方の群馬県の石器群に着目し、石材の分布とそれを取り巻く石器群の石材の選択から、この地域での集団活動の様相を検討することを目的としている。

一 群馬県内の石材分布

この地域は利根川の上・中流域に相当する。利根川流域の地形は、上流部では河岸段丘や丘陵性台地が形成され、中流部は小河川による洪積台地が形成されている。こうした小河川は台地を浸蝕することによって周辺に礫を供給している。この地域は、利根川の北部、東部、西部は火山等の山地に囲まれ、南東に平野が展開する地形的特徴を示している。

石材の分布についての研究は地質構造を参考に中東・飯島両氏が各石器石材の産出地の調査をおこなっている。特に遺跡で多数利用される黒色安山岩や黒色頁岩に着目し、その産出地がいずれも利根川上流域に求められるといった成果はその後の石材研究を進展させた（中東・飯島一九八四）。またここでは、遺跡で他石材の採集可能地も推定し

ている。

この地域の周辺も含め、石材分布の状況は、千葉県での調査の成果に求められるが、ここでは、石器群の石材組成の差や分布する石材の種類によって類型化されている（田村・澤野一九八七）。その中で群馬県は黒色安山岩と黒色頁岩に代表される「上野型」として分類されている。この黒色安山岩は産地推定法の確立に伴い、理化学的に産地の判別が進むことによって、県内では西部に位置する八風山や荒船山周辺にも分布することが確認されている（柴田・上本・山本一九九一・山本一九九三）。こうした産出地の判別が可能となった現状において、この地域の石材が他地域（相模野台地、武蔵野台地、下総台地等）に持ち出されている広域石材の指摘もされている。最近ではこうした石材を含め河川を単位にした、範囲を限定した礫の分布と露頭の観察が細かく調査されている（麻生一九九二・関口・井上・桜井一九九三）。

一方、遠隔地石材である黒曜石の原石産地の推定もおこなわれている。県内では現在のところ石器石材の産出地は確認されていないが多くの信州方面に求められる。一部栃木県の高原山産のものも認められている。

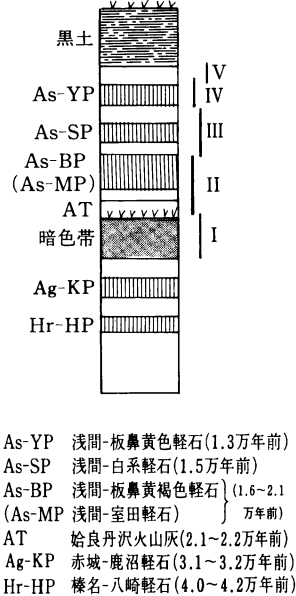
このように県内の主要石器石材の産出地の分布も解明さ

れつつあり、それがこの地方の石材分布の特色を示している。

二 石器群の変遷（図1・図2）

石器石材について検討する前に石器群の変遷と様相について述べておきたい。石器群は後期旧石器時代に集中している。その変遷は全国編年の対比によって概ね同様な傾向を示している。しかし、層位の違いや、重層遺跡の例が少なく、石器群の時代的な偏りも要因して遺跡間の比較を難しくしている。したがって、編年が整いつつある石器群の編年基準（武蔵野編年等）に直接対比できない。こうした制約のもとに地域編年の確立が待たれるが、佐藤氏の前半期の石器群の編年（佐藤一九九一）以外は系統的に論じられていない。しかも時期を限った編年研究は大工原・麻生両氏によって提示されているに過ぎない（大工原・麻生一九九一）。しかしその後は、岩宿フォーラム実行委員会によって県内石器群の時期別集成がなされ、現段階での変遷観が提示された（岩宿フォーラム実行委員会一九九四）。これは従来の研究史を踏まえ、石器群の時期を決定する鍵となるテフラの堆積によって位置付け、その中で細分をおこない、後期旧石器時代を主要器種の分類によりⅠ～Ⅳの

後期旧石器時代の石材分布と石器群の検討（井上）



時期	遺跡名(所在地)
V	房谷戸 I、28荒砥北三木堂(前橋市)
IV	25頭無(前橋市)、26樹形(宮城村)、27北山(笠懸町)
III	下触牛代 I、武井 II、23三ツ屋(大胡町)、24御正作(大泉町)、見立溜井 I
II	22多胡蛇黒(吉井町)/岩宿 AII、飯土井中央 I
I	西部 1 古城(安中市)、2 北山(藤岡市)、3 天引狐崎(甘楽町)、4 天引向原(甘楽町)、5 白倉下原(甘楽町)
	北中部 6 善上(月夜野町)、7 後田(月夜野町)、8 勝保沢中ノ山(赤城村)、9 見立溜井(赤城村)、10 諏訪西(赤城村)、11 房谷戸(北橋村)、12 分郷八崎(北橋村)
	東部 13 熊の穴 II(前橋市)、14 二之宮千足(前橋市)、15 飯土井中央(前橋市)、16 下触牛伏(赤堀町)、17 堀下八幡(赤堀町)、18 書上本山(伊勢崎市)、19 武井(新里村)、20 和田(笠懸町)、21 岩宿(笠懸町)

図 1 群馬県のテフラの層序と石器群の変遷

四期に区分している。この編年についてはテフラの特色を生かした時間軸の設定に目安を与え、地域性をもった変遷を示している上で有効と考えられる。

今回はこの編年をもとに石器群の時期区分をおこない、新たに後期旧石器時代の終末段階をⅤ期として設定した。こうした点から石器群の検討はほぼ、県内全域に分布するⅠ期を中心におこなっていききたい。

三 各石器群の検討

1 分析の視点と方法

ここでは改めて問題の整理をおこない、分析の前提条件を提示しておきたい。

石材の産出地と石器群の石材組成との関係は、その地域ごとに現れる選択性と利用の方法（石材消費）の違いが認められることから、その在地石材と遠隔地石材の入手・獲得を問題として考えていきたい。つまり石材組成の差を石器群の機能的な差（活動目的の性格の違い）として読みとり、これが組成の違いに大きく影響を与えたものと考えられる。

この前提に基づき石器群の石材の組成と選択、その利用（消費）について考えていきたい。

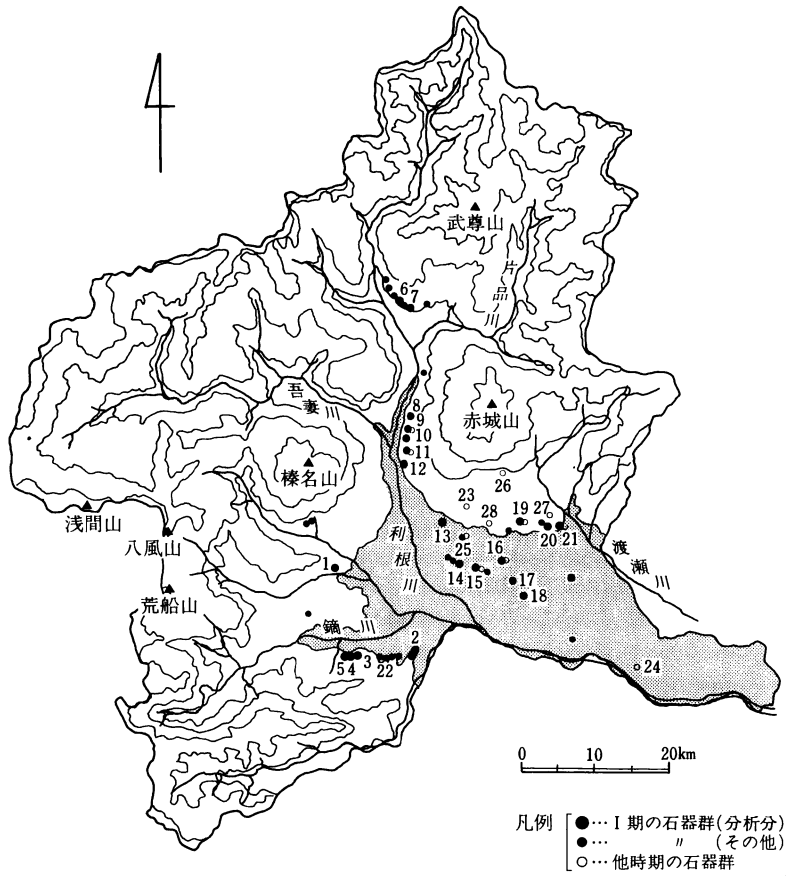


図2 群馬県の遺跡分布

そこでまず地形的な区分として各石器群の立地と遺跡の疎密によって、地域を西部(利根川西部、鐙川流域)、北・中部(利根川上流域)、東部(利根川北東部、赤城山南麓)に三区分した。石器群の分布は主に河川に面した段丘や台地に位置し、利根川などの大規模な河川が遺跡の立地に影響を及ぼしていたと考えられる。I期の遺跡は五七遺跡(岩宿フォールラム実行委員会一九九四)確認されている。ここでは二〇遺跡二三地点について扱った。

石材の分類は組成を占める割合を基準に類型化し、大きく主要石器石材である在地石材と産出地が判別可能な遠隔地石材とそれ以外の客体的に選択される在地、遠隔地石材を含めたものに分類できる。

石材A……黒色安山岩（在地石材）

石材B……黒色頁岩（在地石材）

石材C……黒曜石（遠隔地石材）

石材D……その他の石材（在地、遠隔地石材を含む）

この各石材の利用状況については器種構成を類型化し、砂川遺跡における遺跡構造研究の方法論（戸沢一九六八、安蒜一九九二等）を応用して、残された器種と石材の相關関係で分類をおこなった。その結果、石器製作工程によって作出される三器種と礫素材の一母岩一器種などの無加工の器種の四つの器種に纏められる。

器種a……素材の二次加工が施された製品（ナイフ形

石器、台形様石器、削器、局部磨製石斧など）

器種b……原石、石核といった石器原料

器種c……剥片、碎片などや無調整の石器素材となる

石刃・目的的剥片

器種d……礫素材の一母岩一器種の無加工石器（敲

石、磨石、台石、礫器も含む）

こうした各分類から、石器群の個別検討を加え、石材組成と器種構成との関係と石材の石器製作技術における利用方法の違いを含めた、今回の目的を果たしていきたいと思う。

なお、石器群の資料点数には礫を除いたものを扱い、石材や器種については一部資料の観察によって修正を加えているが、基本的には報告書等の記載に準じている。

2 石材組成（図3）

(1) 西部の石器群

石器群は碓氷川左岸の丘陵性台地に位置する古城遺跡を除き、鐺川右岸の上位段丘上にある。いずれも河川流域に面した分布を示している。古城遺跡（大工原一九八八）、北山B遺跡（軽部一九九四）、天引狐崎遺跡、天引向原遺跡、白倉下原遺跡（三遺跡とも関口一九九四）などの小規模な遺跡が近接して分布する。

石材組成は鐺川流域に分布する黒色安山岩が多用されている。この石材の原石産地は遺跡群から約三〇キロメートル離れた八風山と荒船山周辺が推定されている（山本一九九三）。また黒曜石が客体ながらも組成する地域的な特徴をもっている。各遺跡には自然面を残した円礫や楕円礫が原石として持ち込まれていることから、この石材の採集可能である鐺川等の周辺の河原礫が推定される。石材Cを持ち込む遺跡は古城遺跡IC区、北山B遺跡、多比良追部野遺跡（田口他一九九一）、白倉下原遺跡B区である。この

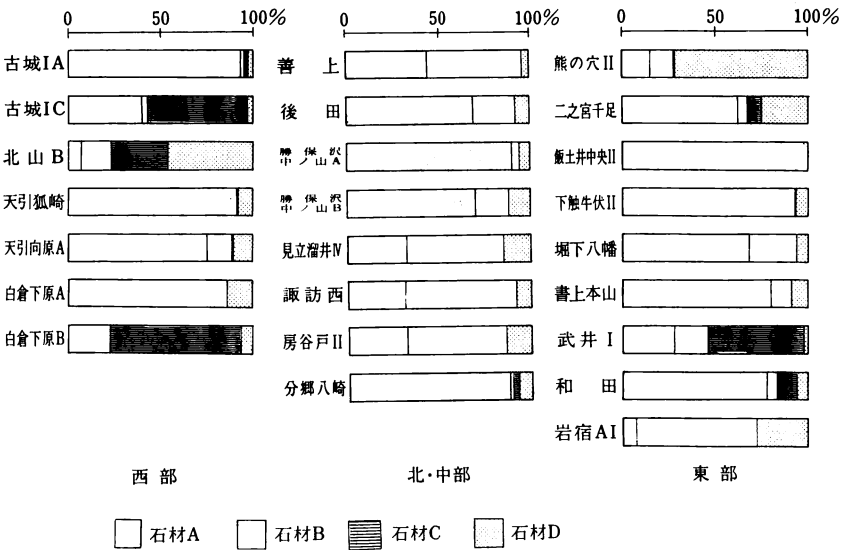


図3 各地域の石材組成

石材は原石を直接消費するのではなく、分割や剥片剥離作業が搬入以前におこなわれていた形跡を示す部分的自然面を残した小型の石核素材が持ち込まれている。また、その原石産出地は信州産（霧ヶ峰、ハケ岳）のものと推定されている。石材Bは一部、剥片剥離がされているが、搬入石器に限定されている。

鍋川流域の石材分布はこの石材A以外にも石器に利用される石材が確認されている（桜井・井上・関口一九九三）。そのほとんどはこの段階に選択されない偏向と遠隔地石材の石材Cを消費する点に石器群の消費傾向が認められる。ほかの遠隔地石材では東北方面に分布する硬質頁岩や茨城県久慈川周辺と推定されるメノウなどが認められる。在地石材の消費量と遠隔地石材との消費量にはその違いが認められ、後者においてはもっぱら搬入製品に限られるが、一部石核素材としても消費されている。石材Cの選択には同質石材でも古城遺跡IC区や白倉下原遺跡B区では産出地が異なる結果がでており、近接した石器群での石材入手に違いを認めることができる。

(2) 北・中部の石器群

石器群は利根川上流部の河段段丘と上流にさしかかる地域の赤城山北西部の丘陵性台地に分布している。遺跡の疎

密によってさらに二地域に区分できるが遺跡の立地的な特徴と石材の組成によって同一範囲として認識した。この地域は地形の制約が多く、特に、舌状の解析谷がいく筋にも延びており、平坦部が少ない。このような条件は遺跡の形成にも影響を及ぼし、また、活動領域も限定されていると考えられる。しかし地形の特徴によって左岸に集中する石器群以外にはさらに立地することが想定可能である。

石器群は善上遺跡（三宅一九八六）、後田遺跡（麻生一九八七）、勝保沢中ノ山遺跡（岩崎一九八九）、諏訪西遺跡（谷藤一九八六）、房谷戸遺跡（谷藤一九九二）、分郷八崎遺跡（白石一九八六）で認められ、他に小竹A遺跡・大竹遺跡（共に大賀一九八五）などの大規模遺跡やその周辺にも小規模な遺跡が台地単位で近接して分布している。遺跡の規模も広範囲にわたり石器の出土量も他地域に比べて多い地域である。

各石器群の石材組成は石材Aと石材Bで占められ、他石材が若干組成する。しかし遺跡ごとの石材組成には両者の割合に変化が認められている。この組成の変化がこの地域の石器群の構造、しいては原石産地遺跡における石材獲得システム、集団の移動などを解明する手掛かりとして重要であると考えられる。この点から主要な石器石材である両

石材の原石産地が互いに近接する点に注意する必要がある。

そこで石材の組成全体に目を向けてみると中束・飯島両氏の指摘する在地石材に限られた選択を示している。まず石材Aについては武尊山周辺に原石産出地が推定され、その転石が近くを流れる片品川を經由して利根川にも分布している。この石材は地域内での利用以外に、この流域一帯で認められ、他地域へ搬出範囲が広域にわたっていることが知られている。石器群はこの石材を主体的に選択して、石器製作、石核素材の製作をおこなっている。また原石の形状も自然礫に近い、大型の楕円形をした礫が消費されている。

一方、石材Aと対極的な器種構成をもつ石材Bの原石産出地は利根川上流で合流する赤谷川流域の赤谷層に含有されていることが確認されている。この石材の選択も石材Aと同様に自然礫に近い大型の原石を持ち込み消費している。しかし石材Aとの利用に違いはその石器素材や石核素材を目的とした地域内消費に比重が置かれたものではなく、他地域に搬出される点素材を目的にしている点に特徴がある。つまり両石材の選択の差異は集団の石材の獲得システムとその目的や石器製作技術にも影響されていると考

えられる。

石材Cの利用は西部の石器群とは異なり、その占める割合は低い。その形状も、他からの搬入形態をもち、剥片のみといった単独母岩であることが多い。後田遺跡の黒曜石は信州産と高原山産と推定されているほかは、搬入目的は不明である。

石材Dの利用は石材Aと石材Bを補う役割として客体的に組成している。その種類は在地石材と遠隔地石材ともに選択され、原石の消費と単独母岩の搬入石器に利用されるが、在地石材として剥片石器に適するチャートや珪質頁岩は選択されない。他に安山岩や砂岩などの礫核石器に適する石材が利根川の河原で分布している。ここで珪質頁岩について在地石材として認識した理由は、その原石の形状が石材A、石材Bと同様に大型のものが持ち込まれている点で類似しているからである。また他地域との関係を示す、遠隔地石材の在り方は、黒曜石ではなく、東北産の硬質頁岩が石器石材に利用されている。

(3)東部の石器群

石器群は赤城山南麓のいく筋にも延びている小河川が形成する洪積台地に立地する。旧石器時代全時期にわたって最も遺跡が集中する地域である。主な石器群は熊の穴Ⅱ遺

跡(都所・狩野一九九二)、下触牛伏遺跡(岩崎一九八六)、堀下八幡遺跡(岩崎一九九〇)、二之宮千足遺跡(大西他一九九二)、飯土井中央遺跡(岩崎一九九二)、書上本山遺跡(岩崎一九九二)、武井遺跡(杉原一九七七)、岩宿遺跡(杉原一九五六)、和田遺跡(若月一九八三)で認められる。他にも大規模、小規模を含め多数の石器群が分布している。

各石器群の石材組成は西部や北・中部の組成とは異なり、石材Aにその主体をおきながらも、多種多様の石材を利用している。この地域においては大規模な石器石材の産出地は分布せず、石材Aや石材B等については利根川の河原で認められるにすぎない。

したがって、石器群と原石産地とは距離をもつ地域であることから、在地石材の選択にも差が生じている。

石材Aの搬入石材の形態は拳大程の自然面を残した分割礫が多く、他地域の形態に比べやや小型である。しかし、持ち込まれる個体数は石器群の規模に比べて多数である。石材の消費も原石のものからこうした石核素材からのものが認められる。

石材Bも石材Aと同様な形態を示すが、数量的に少ない。しかし一部岩宿遺跡周辺部においてはこの石材が主体

となっている。石材Cについても西部の石器群の様相と類似した組成をもち、製品を中心に、石器製作の形跡を残した素材も認められる。

石材Cの利用は武井遺跡、和田遺跡、藪塚遺跡（須藤一九八六）で信州産のものが客体的に組成している。石材Cを含め、石材Dは原石を選択したものではなく、石器製作における初期段階からの全工程は認められず、その消費の前段階を経て持ち込まれた石器素材あるいは他で製作された石器に利用されている。また一部、東北産の硬質頁岩を搬入石器の石材として組成する石器群もある。

また在地石材の偏りとして、在地石材であるチャートが主体的に選択されない特徴が認められる。

3 石材別器種構成と原石の消費（図4）

次に石器群の具体的な各石材ごとの選択性とその石材の利用（石器製作技術の初期段階、つまり素材剥片の剥離の種類）から、器種構成が与える石器群の機能的な役割を考えていきたい。

(1) 西部の石器群

石材Aは原石をそのまま持ち込み、そこで石器製作に關するすべての工程がおこなわれている。原石素材の形態は

約一キログラムを越える大型のものが選択されているが、持ち込まれる母岩数は少ない。特に白倉下原遺跡A区、天引狐崎遺跡では一つの原石が消費尽されている。また古城遺跡IA区・IC区や白倉下原遺跡B区、天引向原遺跡A区では原石を分割あるいは分厚い大形剥片の石核素材が持ち込まれている。石器製作技術は不定形な横長剥片剥離技術を基本としている。工程にも連続性は認められず、原石から直接剥片を剥離している。また器種構成も製作初期工程で剥離される剥片が多数を占め、石核も多い。製作される石器は少なく、台形様石器や削器などの僅かな石器構成のほかは定型化されたものは少ない。母岩は関係に近いほど還元され、石器群内で消費が完結されている。

石材Cについては石核素材を利用し、剥片剥離をおこなっている。またナイフ形石器等の製品を同時に搬入している。原石の消費は縦長剥片剥離技術が適用され、石器素材が剥離されている。この点において石材Aと石材Cとに持ち込む石材の形状と製作技術の初期段階に相違が認められる。

(2) 北・中部の石器群

北部の後田遺跡や善上遺跡等では石材Aの原石は約一〜三キログラム程のものが選択され、石材Bや石材Dの珪質

地域	遺跡名	資料数	石材器種	石材A				石材B				石材C				石材D			
				a	b	c	d	a	b	c	d	a	b	c	d	a	b	c	d
西部	古城 I A	86	●	●	○					●				●				●	●
	古城 I C	523	●		□			●	●	●		△	●	□		●		●	●
	天引狐崎	597	●	●	○			●				●				●	●	●	●
	天引向原A	268	●	●	○			●						●		●	●	●	●
	白倉下原A	403	●	●	●			●								●	●	△	●
	白倉下原B	120	●		□							□	●	□		●		●	●
北中部	善上	933	●	●	□	●	□	●	□							●		●	●
	後田	4263	●	●	○			●	●	□	●	●		●		●	●	△	●
	諏訪西	277	●	●	□			●	●	○								△	●
	房谷戸 II	1292	●	●	□			△		□	●					●	●	△	●
	分郷八崎	287	△	△	○			●		●		●		●		●	●	●	●
東部	熊の穴 II	128	●		□			●		□				●		△	●	○	
	下触牛伏	2039	●	●	○			●		●		●		●		●	●	●	●
	堀下八幡	960	●	●	○			●	●	□	●	●	●	●		●	●	●	●
	書上本山	303	●	●	○			●	●	△								△	●
	武井 I	44	●	△	□			●	●	□		□	●	□				□	
	岩宿 A I	29			△			□	△	□								□	
	和田	86	●	●	○			●		●		●		△		●		●	●

●1%以下 ●1～5% △5～10% □10～50% ○50%以上

図 4 石材別器種組成

頁岩の原石は約一キログラム程のものが選択されている。原石産地付近では大形の原石が遺跡に持ち込まれ、やや下流では石核素材の中形のものが持ち込まれている。両者の石材の選択には石器製作技術とその入手システムの変化が影響していると考えられる。その変化とは石材によって目的に応じた製作技術の体系化し、原石を石器群内で消費を完結させる石材Aと石核素材と石器素材剥片を剥離・製作する石材Bに分けられる点にある。

器種構成において石材Aは剥片と石核によって占められ、ナイフ形石器などの特定石器の製作は少ない。また素材の形状を生かした調整によって製作される一時的な石器が製作されている。石材Bでは剥片類が多数を占めるが、石材Aの剥片とは異なり、比率からして石刃などの素材剥片が多数剥離されている。しかも石核は少ないといった特徴をもち、母岩に還元されるものも少ないことから他地域に搬出される石材と考えられる。これはこの地域の石器群が後田遺跡のような原石産地遺跡が形成されていることに関係している。このような石器製作技術の構造の変化は石器群の「二極構造」(佐藤一九九二、石刃技法の確立と石材の関係が要因として指摘されている(田村一九八九)。

(3)東部の遺跡群

石材Aは原石と石核素材が選択されているが、持ち込まれる母岩数も多い。特に自然面を残した原石の分割礫が素材として消費されている。その他の石材は石材Bを除き搬入形態をとり、原石段階からの消費は認められない。剥片剥離技術は石材Aでは横長、剥片剥離、石材Bや良質の石材では縦長剥片剥離がおこなわれ、石材による利用の違いがこの地域でも認められる。器種構成ではナイフ形石器や台形様石器は直接製作されるものは少なく、搬入石器が持ち込まれている。剥片と石核が多数を占めるが、遺跡に残される素材剥片、石核素材は少ない。原石の消費は石器群内で完結するほかに、搬出されていく石材も存在する。石材Cも製品や石核素材として持ち込まれ、使用と二次加工を中心に消費されている。石材Aを主体的に消費するのは下触牛伏遺跡、和田遺跡などが相当する。石材Bに偏るのは岩宿遺跡周辺で認められる。

四 他時期との石材選択の比較 (図5)

ここでは以上に示した暗色帯の石器群の石材様相を他時期の石器群と比較検討し、石材の時期的な選択の違いについてみていきたい。

まずⅠ期以前では石器群の性格や編年的に問題を残し不

明な点を残すが、在地石材の石材Bが多用されている。他にチャートや安山岩等が利用されている。石器群の分布する地域の石材を選択する点に特徴をもつ。Ⅱ期についても資料的に問題を残すが、在地石材を利用する傾向となり、石材Aと石材Bの選択は減少する。この時期から両者の在地石材の選択性に変化が起こり、石材による利用目的が明確化し、石材Cや多種多様な石材Dが代わって選択されるようになる。Ⅲ期では石材Cが主体的に消費され、槍先形尖頭器等の石器製作中心に、他の石材は石器製作に利用されなくなる。このような石材・器種構成ともに単純な組成となつて、石材選択の変化がさらに進むようになる。Ⅳ期には再び在地石材の石材Bが利用されるが、石質的に類似した遠隔地石材である東北産の硬質頁岩も多数持ち込まれている。石材Aはほとんど利用されない。この時期は細石器文化が全国的に広がり、石材の動きと細石器製作技術の類型が結び付いた地域性を示している。したがって、この地域では東北日本の細石器文化との関係によって硬質頁岩が選択されたと考えられる。その後の石材の選択の変化はⅤ期に至つて、再び在地石材である石材Aと石材Bが利用される。その選択は石材Bが主体となり、石材と石器製作技術とが結び付いたシステムの中で消費されている。両者

には石質的な相違が認められるがその制約を技術面において克服している。参考までに縄文時代の石材組成は同地域、同石器群での資料は石材Bに主体が移り、石材Aとの組成が逆転するのが一般的となる。このことは当時の社会構造や、石器自体の機能性にも関係し、直接の比較に無理

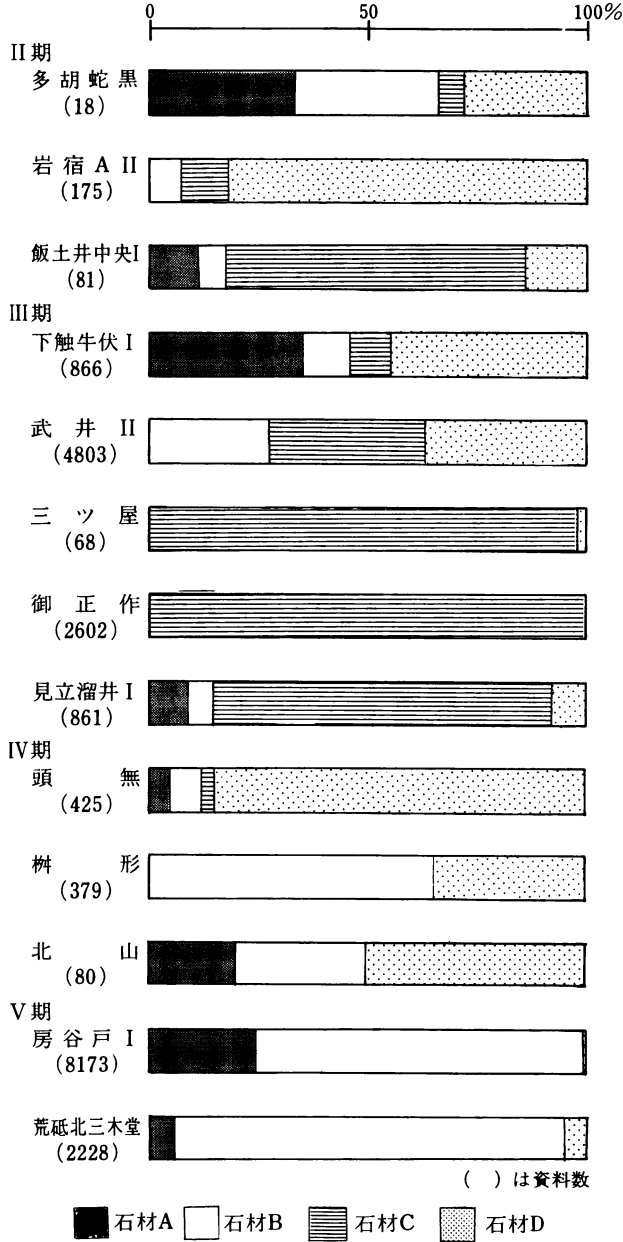


図5 他時期の石材組成 (II~V期)

が認められるが、石材選択の変化は縄文時代になってようやく安定化するようである。

五 各地域における石材の選択と入手システム (図6)

以上のように各石器群の石材の選択とその原石の利用の

関係について暗色帯出土の石器群を例として検討してきた。そこでこれらの結果から、石材の入手システムについて纏めておきたい。

そこでⅠ期の石器群を武蔵野台地の同時期の編年に対比することによって時期的な位置づけをおこなうと、西部の石器群はⅨ層下部～Ⅶ層下部段階に、北・中部の石器群は分郷八崎遺跡のⅨ層段階を除き、他はⅦ層段階～Ⅵ層段階に相当する。東部の石器群はⅨ層段階～Ⅵ層段階の各々の時期にわたっている。こうした石器群の時期差は石材獲得にも関係しており、石器群は西部と東部地域に古い段階から存在が認められ、北部の大規模な遺跡はやや時期が下っている。この点に着目すると各地域ともに原石の選択とその形状にそれが示されていると思われる。

西部の石器群は石器石材は石材Aと石材Cによって石器製作がおこなわれていることが確認できた。在地石材の石材Aは鐮川周辺に原石産地が推定されている。石器群はそれを直接採集によって石器群内で消費が完結する。また持ち込まれる母岩も少なく、しかも在地石材の選択はこの石材に限定される。一方、石材Cは遠隔地石材として信州方面から石核素材が持ち込まれ、石器と素材剥片が製作されている。つまり石材Aは少ない個体で石材Cを利用した石

器を補うための一時的な利用（粗雑な台形様石器と石核素材の製作）に用いられている。

したがって、石器群の性格は黒曜石の産出地周辺との関係をもった小集団が西方への移動途中に在地の石材を消費しながらさらに移動を繰り返していく、あるいは、狩猟・生活活動の場として目的に応じた石器を製作し、使用するといった石器群完結消費型を示している。

北・中部の石器群では在地石材の石材Aと石材Bの選択に構造変化が認められる。主体となる石材Aは原石の石器群内での完結消費が著しく、石材Bは原石が完全に消費されるか、石刃などの石器素材剥片、石核素材が製作されている。これらは石器群から持ち運ばれているものもあり、石材利用に目的が反映している。これは石刃技法との関係による石刃・縦長剥片剥離技術がシステム化し、石材を能率良く利用している。在地の石材に偏り、多地域の搬入石器に限定する点から、残される定型石器は組成全体からして僅かであり、狩猟活動のための石器製作というより両石材の消費によって石器素材と石核素材の製作を目的としていることが考えられる。

つまり石刃の剥離技術と結び付いた石材Bの選択は、その入手システムも地域間を越えた集団の活動パターンに組

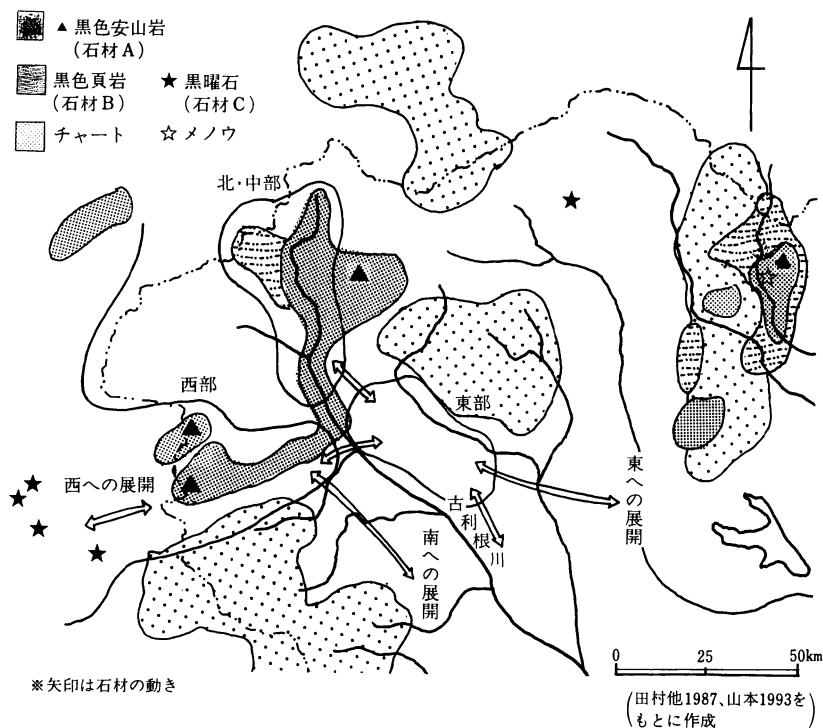


図6 主な原石産地と石器群との関係

み込まれている結果を示していると思われる。こうした石器群はⅧ層段階に認められ、北部の後田遺跡、善上遺跡、小竹A遺跡、大竹遺跡等の大規模な遺跡はこうした様相を示している。また、中部の勝保沢中ノ山遺跡でも石材Aが大量に消費されている。石材Bの利用も北部と同様な剥片剥離技術が適用され、素材剥片が製作されている。しかし、もっぱらこの石材は石器群内で消費され、台形様石器が多数製作されている。このように日常における生活活動の目的に応じた在地石材の使い分けには、この段階の「石材の管理」が窺える。そして遺跡群の形成は同時に原石獲得がシステム化された石材産出地付近の獲得ルート地点をも示している。

中部の石器群でも石材産出地周辺で採集できる程の大きさの石材が選択され、このルート上がいくつかの石材中継点の役割を示していると考えられる。したがって「原石産地遺跡」とはやや概念的には異なるが、この段階になって組織的な石材の獲得が出現し、集団の直接採集あるいは間接的な接触が想定され、「原石産地遺

跡」が形成されるといった北部への進出がおこなわれたと思われる。この地域の中で分郷八崎遺跡の石材組成は主体が石材Aにあり、石核素材から消費されている。石材Cの石器とそのほかの在地石材の消費はこの地域の石器群とは異なった様相をしている。

東部の石器群においては石材Aを主体にする遺跡は古い段階に相当する。下触牛伏遺跡、和田遺跡等の石器群は石材Aの利用のほかに搬入石器によって構成されるこの段階の他地域と類似している。しかしその石材は原石以外にも多数持ち込まれ、しかもその利用が完結しない石器や石核素材あるいは剥片類が他へ搬出された形跡を残している。遺跡の規模から在地の石材を限定して選択し、消費する西部の石器群と類似する性格を示している。石材Bや他の在地石材を選択する石器群は北・中部の石器群のルートの延長線上にあり、その入手によって石核、石器両素材の形状は小型化している。書上本山遺跡や堀下八幡遺跡等でも石材Aが選択されるが、搬入石器は遠隔地石材を利用している点で、東方からの移動が推定できる。この経路に在地の石器石材が分布し、集団の活動の目的に応じた石器を選択し、利用している。またⅦ層段階の石材Bの動きもこの地域で認められ、搬入石材が東北産の硬質頁岩が持ち込まれ

ていることからこの地域との関係あるいはさらに遠方との集団との関係が指摘できる。

したがってⅨ段階の石器群は西部と東部においては石器群を形成する集団の目的に応じた在地石材の選択、消費と集団が携帯する遠隔地石材の石器の両者の用途による使い分けがおこなわれている。在地石材の石材Aに限定され、信州産の黒曜石が東部の石器群にまで搬入されていることから、活動領域が広範囲にわたって集団が移動を繰り返す、その都度必要に応じた石材の選択が考えられる。

一方、Ⅶ層段階では石材獲得のシステムが確立されるように、集団の組織的な入手活動を示した石材の利用が認められる。そして、この地域の北部への進出はこの段階になつてからであると考えられる。

このように石器群が示す石材の組成差は、活動領域と集団の構造との違いを現していることが認められる。

おわりに

旧石器時代の石材研究は全国的な把握から、遺跡を単位にした地域性を考えることがようやく可能となった。石材という分布が限定された資料の動きは地域内外を問わず、集団の移動や地域性の特色を現している。

今回の分析によって、石材組成から石器群を残した集団の活動の一端を窺うことができた。石器という当時の主要道具の素材を求めこの地域でシステム化されていた行動から旧石器時代の社会を歴史的に構築していくことは重要であると考えられる。

今後は石器群ごとの石材の組成とそれを反映した石器製作技術について検討をおこない、時期差と地域差を明らかにする目的と、他地域との関係を比較することによって社会構造を考えていきたい。旧石器時代の研究の一つである石器研究は、実際のこうした石材の地域性と石器の地域性の両者を展開させることによって、より具体的にモノや人の動きが復原できると考えられる。方法論的な課題を多く残すものとしても、こうした研究が問題を解決していく一つとして提示しておきたい。

最後に本文を執筆するにあたり伊藤玄三先生には多くの便宜とご指導を頂きました。また、大工原豊・関口博幸両氏には県内の石器群についての資料提供および助言・ご協力を頂きました。記して敬意を表します。

(一九九四・一二・四稿了)

参考文献

- 麻生敏隆・大工原豊一九九一「北関東地方の様相」『石器文化研究』三
- 麻生敏隆一九九二「後田遺跡の再検討」『人間・遺跡・遺物——わが考古学論集二——』
- 安藤政雄一九九二「砂川遺跡における遺跡の形成過程と石器製作の作業体系」『駿台史学』第八六号
- 稲田孝司一九八四「旧石器時代武蔵野台地における石器石材の選択と入手過程」『考古学研究』第三〇巻第四号
- 岩宿フォーラム実行委員会編一九九四『群馬の岩宿時代の変遷と特色』予稿集・資料集
- 小野昭一九八八「遺跡分布からみた旧石器時代の社会」『第四紀研究』第二六巻第三号
- 岡村道雄一九九〇「原石産地遺跡における諸問題」『考古学ジャーナル』三一六
- 桜井美枝・井上昌美・関口博幸一九九三「群馬県における石器石材の研究(一)」『研究紀要』一一、群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 佐藤宏之一九九二『日本旧石器文化の構造と進化』柏書房
- 柴田徹・上本進二・山本薫一九九一「宮ヶ瀬遺跡群および神奈川県内出土の緻密黒色安山岩製石器の石材産地」『宮ヶ瀬遺跡群Ⅱ』神奈川県立埋蔵文化財センター
- 田村隆・澤野弘一九八七「先土器時代の石器石材の研究」『研究紀要』一一、千葉県文化財センター

田村隆一九八九「二項モードの推移と巡回」『先史考古学研究』第二号

田村隆一九九〇「野見塚遺跡の先土器時代」『野見塚遺跡』千葉県文化財センター

中・四国旧石器文化談話会編一九九四『瀬戸内技法とその時代』

戸沢充則一九六八「埼玉県砂川遺跡の石器文化」『考古学集刊』第四卷第一号

大工原豊一九九〇「A T下位の石器群の遺跡構造と分析に関する一試論(1)」『旧石器考古学』四一

大工原豊一九九一「A T下位の石器群の遺跡構造と分析に関する一試論(2)」『旧石器考古学』四二

中束耕志・飯島静男一九八四「群馬県における旧石器・縄文時代の石器石材」『群馬県立歴史博物館年報』第五号

山本薫・金山喜昭・柴田徹一九九一「石材組成の変遷」『石器文化研究三』石器文化研究会

山本薫一九九三「緻密黒色安山岩製石器の石材原産地推定方法について」『筑波大学先史学・考古学研究』第四号

山本薫・高松武次郎・小室光世一九九四「武蔵野台地東縁部および大宮台地における緻密黒色安山岩製石器の石材の入手について」『花ノ木・向原・柿ノ木坂・水久保・丸山台』埼玉県埋蔵文化財調査事業団

〈報告書〉

相沢忠洋一九八一「枅形遺跡調査報告書」宮城村教育委員会

相沢忠洋・関矢晃一九八八「赤城山麓の旧石器」講談社

麻生敏隆一九八七「後田遺跡(旧石器編)」群馬県埋蔵文化財調査事業団

麻生敏隆他一九九〇「戸神諏訪遺跡」群馬県埋蔵文化財調査事業団

岩崎泰一他一九八六「下触牛伏遺跡」群馬県埋蔵文化財調査事業団

岩崎泰一他一九八九「勝保沢中ノ山遺跡Ⅱ」群馬県埋蔵文化財調査事業団

岩崎泰一他一九九〇「堀下八幡遺跡」群馬県埋蔵文化財調査事業団

岩崎泰一他一九九〇「飯土井中央遺跡」群馬県埋蔵文化財調査事業団

岩崎泰一他一九九二「荒砥北三木堂遺跡Ⅱ」群馬県埋蔵文化財調査事業団

岩崎泰一他一九九二「書上本山遺跡・波志江六反田遺跡・波志江天神山遺跡」群馬県埋蔵文化財調査事業団

大西雅広他一九九二「二之宮千足遺跡」群馬県埋蔵文化財調査事業団

大賀健・篠原正他一九八五「小竹A遺跡」「大竹遺跡」「関越自動車道(新潟線)月夜野町埋蔵文化財発掘調査報告書」月夜野町遺跡調査会

軽部達也一九九四「北山B遺跡」『第一回石器文化研究交流会—発表要旨—』石器文化研究会

群馬県史編纂委員会編一九八八『群馬県史』資料編1 原始古代1

群馬県史編纂委員会編一九九〇『群馬県史』通史編1 原始古代1

白石典之・大塚昌彦他一九八五『見立溜井遺跡・見立大久保遺跡』赤城村教育委員会

白石典之他一九八六『分郷八崎遺跡』北橋村教育委員会

杉原莊介一九五六『群馬県岩宿発見の石器文化』明治大学文学部研究報告考古学第一冊

杉原莊介一九七七『群馬県武井における二つの石器文化』明治大学文学部研究報告考古学第七冊

須藤隆司他一九八四『御正作遺跡』大泉町教育委員会

須藤隆司一九八六『群馬県藪塚遺跡の石器文化』『明治大学考古学博物館年報』二

関口博幸他一九九三『多胡蛇黒遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団

関口博幸一九九四『白倉下原・天引向原遺跡I（旧石器時代編）』群馬県埋蔵文化財調査事業団

関口博幸一九九四『天引狐崎遺跡I（旧石器時代編）』群馬県埋蔵文化財調査事業団

大工原豊一九八八『古城遺跡』安中市教育委員会

田口正美他一九九一『多比良追部野遺跡』『年報』一〇、群馬県埋蔵文化財調査事業団

群馬県埋蔵文化財調査事業団

谷藤保彦他一九八六『中畦遺跡・諏訪西遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団

谷藤保彦他一九九二『房谷戸遺跡II』群馬県埋蔵文化財調査事業団

都所敬尚・狩野吉弘一九九一『熊の穴II遺跡』『横俵遺跡群III』前橋市埋蔵文化財発掘調査団

三宅敦氣他一九八六『善上遺跡・三峰神社裏遺跡・大友館址遺跡』月夜野町教育委員会

若月省吾他一九八三『北山遺跡』『和田遺跡』『笠懸村誌』別巻一、笠懸村（現笠懸町）